隨　　想

池　辺　展　生

人間は生物の中で特異なものである。人間は赤道直下にも，また氷雪におおわれた極地や高山地帯にもすむことができる。そろそろ海中にも，空中にも，さらに月世界にも生活することができるようになってきている。考えてみれば，こんなにどこにでもすめる生物というのは他にはない。ところで，生物というものはそれぞれある環境に適応するように進化してきている。人間は酸素のある20℃内外で適当に湿度がある気候の陸地表面にすみ，直立二足歩行をし，他の生物がつくり出すものを食べて生きている。したがって人間はそのような環境に適応しているわけであろう。人間がどこにでも住めるというのは，すみたい場所にこのような場所を周囲につくることができるからに他ならない。衣服をきて身体のすぐまわりを暖め，あるいは逆に日をさえぎり，また住居をつくり，その中の空気を暖めたり冷やしたりして適温の空間をつくる。高山・海中あるいは月世界にも酸素を持って行くことによって生活する。もちろんその量が限られているからその時間は限られている。一般に生物はそのすむ場所の環境に適応するか，あるいは——この方が多いと思われるが——適当な環境の場所に移動する。人間の場合，逆にその周囲の自然環境の一部に自分あるいは自分たちの生活できる環境をつくりだす。それが少数の場合は問題がない，あるいは無視できるが，多人数の集団社会の場合には自然環境自体に大きな影響を及ぼさずにすまない。古代文明の生まれそだった近東・アラビア・北アフリカは，もともと今のような砂漠の地帯であったのだろうか。否，やはりもっと緑のあった所にちがいない。もちろん気候の変化もあったが，自然がそれに抵抗・対応して行く復活能力を失わせてしまったのは，そこにすんでいた人間の集団に他ならないともいわれている。

ヒト科は1500万年前の中期中新生の初めに樹上生活から下りて二足歩行の地上生活にうつり前足が解放されて手として発達した。これがヒト科の最初といわれる前猿人ラマピテクスである。地中海がほとんど乾上ったといわれている環境の大変化メッシニアン・クライシスがおさまった頃 500万年前（鮮新世始め）のアフリカに出現したのが猿人アウストラロピテクスである。猿人は直立二足歩行をし，すでに原始的な道具を使用していたといわれている。300～250万年前（古最新世始め——普通には鮮新世後期とされている）には道具を，そして火を使用する原人ホモ（ピテカントロプス）・エレクタスが出現した。そして，約20～15万年前の旧人ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシスの出現，4万年前頃の新人ホモ・サピエンス・サピエンスの出現とつづき，人類の進化は急ピッチとなり，生きて行くために労働（手）と思想・文化（頭）——自然の認識が強調され，手と頭がどんどん定向進化してきた。原人の出現（ホモ属の出現）と，期を同じくして気候に寒期と暖期がくり返されるようになり，100万年前の新最新世に入るころからはこれが氷期と間氷期の交代となる。人はこれらの気候の変化に対応し，住める環境をつくること，食物を得ることに努めなければならなかった。これは人類の急速な進化につながったが，また見方を変えれば，人間ときびしい自然との戦いに外ならない。戦には常に破壊がともなっている。いいかえれば人間は 300万年の昔（第四紀の始まり）以来，自然を破壊しつつ進化してきた歴史をもっているということである。つまり人間の行動が自然の破壊につながることは歴史的必然であると極言することもできよう。これでは人間は自然破壊の凶悪犯として滅亡への道をまっしぐらに進むこととなるであろう。しかし救いがある。それは人間の定向進化の最大なものが頭であること，考えることであることである。

そこで自然保護運動が始まった。私は子供の頃に，渡辺万次郎氏（現東北大学・秋田大学名誉教授）の書かれた「風景の科学」という本を読んだ。今手許にないので正確には引用できないが，その中に，欧米と東洋（日本など）をくらべて，東洋の方がいろいろの建造物が自然によく調和しているとのべ，東洋人の感覚と知性がたたえられていたように記憶している。しかし現状はどうだろうか，少くとも日本に関する限り，これは逆であるということができよう。これは19世紀末以来の欧米の自然保護についての自覚の向上とその重視の結果であるといえよう。欧州の中でイタリー・スペイン・ギリシヤなど古くから国と文化の盛えた地域とイギリス・フランス・スイス・ドイツなどとくらべてみると前者の方が自然破壊の程度がはげしく，なかなか自然の復活（もちろん気候的・地域的要因もあるが）がむつかしいような感がする。現下，いわゆる開発途上国，国内においては，山村・田園など自然がまだ残っている地方で生活の向上・便利

・利益を追求して造成や，工場建設・道路建設など残された自然の破壊が，進められている。要は土地は人間がつくったものではなくて，自然からの借りものであると考えることである。自然の保護が法律上の点でできなくなるというケースが，しばしば起っている。法律は人間がその社会を保つためにつくったものであり，自然の法則はそれに先行するものであろう。自然と人間との関係については，法理問題ではあり得ない。台風のとき，地震のとき，構造物をこわしてはいけないといくら叫んだとしても法律では対抗できないことを知るべきである。

先日，ＮＨＫの南極の衛星中継のテレビを見て感じたことがある。昭和基地やみずほ基地でのきびしい自然とたたかいながらの生活と研究，そしてペンギンの可愛らしい生態に感激したが，アメリカ基地の工場都市の出来かけのような様子，そして，資源開発のための，“なまぐさい”国際的な動きなど，この地球上に残された最後のありのままの自然の将来について考えさせられたことである。

自然保護ニュース

比良山系の山小屋問題
—なぜ“国体小屋”に反対するのか—

比良自然史研究会

比良山系は急峻で複雑な山容を呈し，近畿地方に於ては珍しい大規模な高層湿原やササ原を有するなど，その自然は小さな山系ながら極めて変化に富んでおり，滋賀県および近畿の自然を語るうえでは欠かせない存在となっています。（比良山系を含めて，びわ湖集水域の自然保護の重要性についてはＫＯＮＣ会報№１の吉良教授の論文を参照されたい。）

私たち比良自然史研究会はこの変化に富んだ比良山系の自然とその移りかわりを特に人間活動との関わりに注目しながら多角的に研究していくことを目的に自然発生的に成立した研究グループであり，自然保護運動の推進を第一義的に考えるものではありませんが，目前で進行する自然破壊を座視することは許されません。現状に於る問題点を指摘し，その解決を図ることは私たちの重要な課題の一つであるからです。

さて，私たちが「54高校総体・56びわ湖国体の登山競技の会場として比良山系が選ばれ，実施計画は既に出来上がり，その計画には新道の伐開や大規模な山小屋建設が含まれている。」という知らせを受けたのは一昨年の暮でした。そして放任できない問題として討論し，次の諸点を確認しました。

1．比良山系の自然全般について

比良山系の自然は度重なる大規模な観光開発や大面積皆伐，林道建設などによって大きく破壊され，今や危機的状況を呈している。

2．湿源の荒廃

比良の自然を最もよく特徴づける高層湿原群については，観光開発で埋立てられた八雲ケ原などは勿論のこと，その他の湿原についても登山者の増加による立入り，踏みつけ，土砂流入などにより陸化，裸地化が著しく，ミズゴケの盗掘なども増加しており，早急に立入り抑制のための保護対策を施す必要があり，まして立入りを促進するような行為（新道伐開など）は厳に慎むべきである。

3．ササ原の荒廃

湿原と同様に登山者の立入り，踏みつけによる裸地化が激しく（ササ原は一旦裸地化すれば土壌侵食が激しく，再生は極めて困難である。）ササの一斉枯死により，裸地化は一層拡大する恐れがあり，立入りを抑制する必要がある。

4．山上での大人数の幕営

山上での大人数の幕営は，今回の予定地は既に観光資本によって破壊され裸地化した部分を使うとはいえ，廃水および屎尿処理の困難性とからんで近年各地で進められている幕営抑制の方向に逆行するものであり，出来る限り自粛し，宿泊は山麓を主体にすべきである。

5．山小屋新設に関して

イ．山上に大規模な山小屋を建設し，大会本部用の施設とするとの計画であるが，大会本部は原則として山麓に設けるべきものであり，もし仮に山上に設ける必要があるとしてもその機能は近傍の既存施設の借用または仮設施設によって充分果し得るものであり，大規模な恒久的施設の新設を必要とする理由は全く見当らない。

ロ．比良山系には既に数十にのぼる山小屋が無秩序